

現地通信

1986年2月16日のコーリー

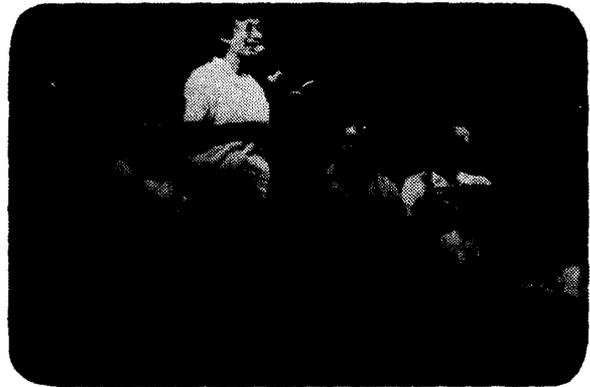
片山 裕*

「ピープル・パワー」革命に至る一連の政治過程のなかで看過することができないのが、2月16日、リサール公園で行われたコーリー派による大抗議集会であった。大統領選とその開票作業に伴う混乱も、マルコス派の例よっての引延し戦術と、国民議会による強引なマルコスの大統領当選宣言で、一応結着をみ、外国から来た報道陣が、またもマルコスの“技あり”かと引き上げかかっていた時だけに、この集会に成功するか否かは、コーリー派にとって大きな賭けであった。選挙期間最終日の前日、やはり同じ場所で開かれた総決起集会の50万人（主催者は200万と発表した）、参加した者の実感からしても、50万という数字が最も実数に近いように思う）に及ばないのは仕方ないとしても、仮に数万人しか動員できないとしたら、選挙後の反マルコス運動において、コーリーが主導権を喪うことは目にみえていたからである。集会は、野党系の新聞などを通じて1週間前から予告され、広く参加が呼びかけられた。しかし、その日が近づいてきても、一向に熱気が伝わってこない。これは惨憺たる結果に終るかもしれないと、正直思った。

さて、当日。私は、東大社研の藤原さんと、車を駆っていくつかの集結地点をのぞいてみた。どこに行っても、数人の人々が心細そうに立っているだけで、通りには人っ子ひとり見当らない。主な通りが黄色いシャツを着た人々の隊列で埋まり、ビルからは絶え間なく紙吹雪が舞った投票日前の総決起集会と較べ、様変りの閑けさである。ひょっとして新聞を読み間違えたかと *Malaya* を何度となく読み返すが、確かにそこには各地区の集結地点と時間が案内されている。ともかく、デモ隊をみつけようと、メトロ＝マニラをあちこち走り回った。そして、ようやくそれらしきものに出会ったのが、マニラ市とケ

ソン市の境にある ウェルカム＝ロトンダの辺りであった。しかし、それも、いわゆるフランス＝デモで、両手を横一杯に広げることによって辛うじて通りを覆う態のものであった。

なぜ、選挙期間中のように人々は街頭に出てこないのか。一つだけ思い当ることがあった。前日マカティで催されたコーリー派の抗議集会で、若者がひとり何者かによってビルの窓から狙撃され殺された事件である。その若者が立っていたトラックの荷台



1986年1月27日、マカティの集会で演説するアキノ大統領候補

には、数分前までコーリー自身が立って演説してただけに、人々は、これをコーリーとその支持グループに対する露骨な恫喝と看做した。選挙も終わって、マルコス派がいよいよ力による本格的な野党弾圧に出る、そう受け止める者が多かった。

私たちは、フィリピン大学 (UP) の教職員の集結地点であるイントラムロスに向かった。ここにも人はあまり集まっていないのではないかと懸念されたが、意外にも100人以上の人が集まって、すでに氣勢を上げていた。見知った顔も多い。そのうちの何人かに、マカティでもパサイでもほとんど人が集まっていなかったと告げると、彼らは、さもおりなんと一様に顔を引きしめながらも、しかし、ここが正

* Yutaka Katayama, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

念場、是が非でもこの集会は成功させると、力強い。

かくて、リサール公園へ向けてのデモに私たちも参加した。途中、同じく公園に向かうトラックに乗ったデモ隊に多く出会い、UP 隊の士気は次第に高まっていく。そして、リサール公園。いた、いた。メトロ=マニラだけでなく地方からも多くの参加者が、それぞれの旗の下に、ほぼルネタ=グランドスタンドを一杯に埋め尽くしていた。これならまだ戦える。

集会は、教会関係者が前面に出たの、コーリー派のいつもながらの形式であったが、式が進行するにつれて、ラジオ=ヴェリタスで集会の様態を聞いて駆けつけた人々で会場は立錐の余地のないほどに脹れ上がり、熱気があふれてきた。やはり、多くの人々が自宅で wait and see を決め込んでいたのだ。聞く



1986年1月29日、ケソン市で開かれた UNIDO 派の大集会

と、それまでの集会と異なり、ほとんどの参加者がバスや車で直接会場にやってきたという。皆、途中でのテロを恐れたのである。

集会は、コーリーがマルコス系企業のボイコットを提案すると、最高潮に達した。参加者のなかには、納税拒否やゼネ=ストの呼びかけを期待していた者がいて、彼らはいささか拍子抜けした気配だったが、大多数の参加者がコーリーの提案を真摯に受け止め、大いに闘争心をかき立てられたようであった。

あとで消息通から聞いたところでは、この日の集会開催には、コーリー側近の間にも反対意見が多かったという。彼らも、人が集まらなければ、コーリー一派にとって致命的な打撃になると懸念したのである。それに対して、コーリーは、断固集会を開催し、しかも成功させると、いい切ったそうである。コーリーは自分の人気に対して絶対的な自信を持っていたのである。政治技術的にかけては素人に等しいが、究極的な政治理念の正しさと大衆に対するカリスマ的人気への確信、これをいつのころからかコーリーは身につけたように思われる。コーリーの予言は当たった。一旦沈静化するかにみえた反マルコス運動は、この日の集会の成功で、再びはずみをつけ、6日後のエンリレ国防相、ラモス参謀総長代理による決起を導いたのである。時あたかも、レーガン大統領の命を受けたハビブ特使がマニラに降り立った日のことである。(京都大学東南アジア研究センター助手)